

新型コロナウイルス感染症に臨む 医療従事者の誇りと覚悟

*Pride and preparedness of healthcare professionals
facing the new coronavirus infection*

勝原 裕美子¹

Yumiko KATSUHARA

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）は、あまりにも突然やってきて、瞬く間に世界中を震撼させた。死者数が日に日に増加するなかで情報が錯綜し、人びとはよくわからないことへの恐怖や不安と、身を守るために必要な感染予防グッズの入手困難で混乱した。そして、個人が、組織が、社会が、いかに生きるか、何を大事にするのかを問われる瞬間を幾度も経験することになった。

報道されるニュースは一部なので鵜呑みにはできないが、国によってトップの発言や施策が異なっているのも衝撃だった。天秤の片側に「人命」、もう片側には「経済」を乗せ、そのどちらを優先させるのかが国によって異なるのだ。どこでバランスをとるのか、どこまでなら何を我慢できるのか。限られたエビデンスのなかで、現在と未来の両方を考えた意思決定がされる。国民は、他国と自国を比較し、気をもんだり胸をなで下ろしたりする日々が続いた。

コロナ禍によって職を失った人や生活に困窮をきたす人が増えた。その一方で、在宅ワークやリモート会議が進んだ企業の中からは、むしろ生産性が上がったという声も聞く。今、元の労働形態に戻すのか、このままでいくのかが検討されているという。すんなりこのままでいこうとならないのは、生産性と引き替えに失ったものがあるからであろう。たとえば、「生産性」と「顔の見える関係・コミュニケーション」が天秤の両側に乗っていると想像される。

大学では、何ヶ月間も教員の録画授業だけで過ごした学生や親の不満が、学費返還問題を引き起こした。そもそも大学とはどのような価値を提供するところなのか。大学教育とは何なのかが問われている。

このように、コロナ禍において、これまで当たり前にしてきたことが当たり前でなくなり、あっという間に均衡が崩れた例は枚挙に暇がない。人とウイルスとの生存バランスが崩れたのだから、それはそうだろう。もしかすると、これまでは均衡がとれていたと思うのは錯覚で、そもそもいつどうなってもおかしくない世の中に、私たちは生かされていただけなのかもしれない。

医療機関に目を転じてみよう。

感染経路が明確になり、それに合った対策がとられれば感染のリスクは減る。かつて恐れられていたHIVやMRSAなどの感染症は、今では大きく騒がれることがなくなった。そして、おおかたの医療機関では、各種感染症を扱うことを前提に職員教育を行っている。

¹ オフィス KATSUHARA 代表 Office KATSUHARA President

しかし、COVID-19は感染経路がわからないなかで蔓延した。砦となる医療機関では、何をどう対処すればいいのか、すべてが手探りの中で日々の意思決定を迫られる事態となった。

そのようななかで起きた医療機関や医療従事者への偏見や差別による誹謗中傷は、現場に身を置く人たちにとっては本当に残酷なものであった。「汚い」「バイ菌」という声や文字を突きつけられ、入店や乗車拒否をあからさまに受けた彼(女)らの気持ちを考えると、いたたまれない。それでも、自分たちが患者をみなければ誰がみるのかと、当人たちは悔しさややるせなさを押し殺して働いた。というより、感染防護に必要な物資がないなか、自分や家族の身を守ることに必死で、そんな誹りを相手にしているような状況ではなかった。

これまでも、医療従事者に対する患者や家族からの暴言はあった。ただ、その多くは、暴言を吐く側も受ける側も「誰か」ということが明確であった。だから、対処のしようもあった。しかし、今回は、建物への落書きやSNSへの書き込みなど、受診歴はおろか、おそらく一度も会ったこともない人、つまり、顔の見えない人からの差別的発言がほとんどであった。あるいは、「社の方針で、医療従事者の使用はお断り」といった、やはり発信元が抽象的な相手からのメッセージであった。そしてその矛先も、特定の誰かではなく医療機関や医療従事者という大きな括りに対してなので、受ける側も防ぎようがなかった。ただただ、やるせなさや怒りをどこに向けてよいのかもわからないという状況だった。

私たち人間は、ダークサイドも持ち合わせている。通常はなりを潜めていても、何かをきっかけに意識下に登ってくる。目に見えないウイルスに対して、マスクが手に入らないなかで、人びとの「医療従事者＝コロナウイルスを持ち運ぶ人」というイメージが大きくなった。そして、死の恐怖を増長させたのだろう。

COVID-19への対応方法が理解されるようになると、それに比例するかのようには誹謗中傷は少なくなっていった。しかし、なくなったわけではない。たとえば、「ようやく休みをもらえたので帰省しようと思って連絡をしたら、看護師の子どもが帰ってくると地域の目が厳しいから、帰るなと言われた」「妻が看護師だから、出勤停止だと夫が会社から言われた」という声は、いまだに聞こえてくる。本人たちは、そう言われても仕方がないと、自分たちのなかでモヤモヤを納めているのである。

この原稿を書いている令和2年10月現在、世の中は、GoToトラベルやGoToイートなどのGoToキャンペーン事業で沸いている。感染症対策が一定の効果をもたらしたことにより、天秤の重みが、「人命」から「経済」にシフトし始めた。

しかし、そういったキャンペーンを享受できない人が私たちの身近にいる。今でも、医療機関のなかには、県外に出ることや会食に参加することを禁じているところはたくさんある。組織の制限はなくとも、自分が感染源にならないために自粛を続けている人たちが大勢いる。看護系大学関係者にも、実習に行く学生に自粛を呼びかけている以上、自分が出歩くわけにはいかないと、半年以上、自宅と勤務先の往復しかしていない人もいる。

これは、何を選擇するかという選擇の自由の話ではない。この職業を選んだ誇りと覚悟の話であり、それぞれの倫理観の話である。医療従事者は、自らを律しながら、人びとの生き方や生活を支えている。そのことの尊さを、もっと世に伝えていくことが使命だと、私は自らに課している。